

「山岳信仰系」教派神道としての実行教

—富士登山に着目して—

今井功一

江戸時代に普及した富士講、富士講をもとに禄行三志こと小谷庄兵衛が組織した不二道は、いずれも角行系富士信仰の一形態である。近世初頭の行者・角行に始まる独特な宗教的世界観を有する彼らのうちから、明治時代に入ってその装いを改め神道教団としての形を整えていくものが現れる。1882（明治15）年に神道教派として特立した富士講系教派二派のうち、一つがいわゆる富士講を中心とした現在の扶桑教であり、もう一つが不二道を母体とした現在の実行教である。

神道教派はその性格や成立事情によって、特に戦前の研究においては中山慶一や鶴藤幾太、ホルトムなどにより様々な分類が試みられた。戦後においても、例えば『宗教学辞典』では、①山岳信仰系、②純教祖系、③禊系、④儒教系、⑤復古神道系、と分類されている。こうした研究において常に「山岳信仰系」等と分類されてきた実行教は、富士講に淵源を持つ不二道を神道化させたという意味でまぎれもなく「山岳信仰系」の教派である。しかし、実行教と富士山そのもののかかわりはあまり重視されてこなかった感がある。

確かに、教義の上では「信徒五條」に「二、不二山は大神の分魂の御座所と信ず」とあるように、富士山がその中心に置かれる。にもかかわらず、富士山との物理的なあるいは宗教実践的な関係は希薄に感じられる。実行教は富士山中及び山麓に自前の宗教施設を有しておらず、同時期に一派特立した同じく富士講系の神道教派である扶桑教が教団施設として、烏帽子岩神社と天拝宮を富士山吉田登山道八合目に、元祠を北口本宮富士浅間神社脇に有しているのとは対照的である。富士講が富士登山を目的に結成されるのに対して、実行教の前身である不二道は禄行三志の教えをもとにした相互扶助や社会奉仕を主な活動とする集団であったことと関連しているであろう。富士山を信仰することとそこに登ることは決して短絡的に結び付けられるものではない。

とはいえ、教団の行事として富士登山が軽視されてきたわけでは決してなく、その歴史の初めから、教団及び信徒による富士登山は実施されてきた。教団による刊行物の記述から、実行教の教団及び信徒による富士登山に着目することで、実行教が富士山とどのようにかかわってきたのかを考える。